

人生の一ページ 支える

訪問介護では炊事や食器洗いなどをする大越さん。「働くことで元気でいられる」と話す



エイジレス
ふくしま

訪問介護ヘルパー

郡山の大越さん

郡山市の大越さく子さん(76)は訪問介護ヘルパーとして20年以上、地域の高齢者の家事などを支えている。「その人の役に立つことで、人生の一ページに入り込んでいる気がする」とやりがい語る。

友人の誘いで参加

元々、コメ農家をしてきた。現在勤める、介護サービスを提供する「お花畑」(同市)のヘルパーの講習められている。

「ありがとう」必ず

利用者の希望に応じ、炊事やおむつの取り換えなどをする。これまで50人以上を担当し、最長では94歳で亡くなった女性を12年ほど担当した。現在は1日2〜3軒ほどだが、多いときで5、6軒ほど回ることもあった。

本来なら感謝される立場であるが、訪問先を後にする際は必ず「ありがとうございました」と言う。そこには「この年まで働かせていただけたことへの感謝」など、さまざまな意味が込められている。

に友人の誘いで参加し、資格を取得したことをきっかけに2003年ごろからヘルパーの仕事始めた。会社名が「花」で、自分の名前が「さく」であることから運命も感じたという。

「ありがとう」必ず

高齡化社会が加速する現代だが「働ける人はなんぼ年取っても働いた方がいい」と話す。それは「やりがいがある」と元気になれる「ため」で、自らの仕事のおかげで「健康管理ができてい」と実感している。

ヘルパーの仕事のほか、福島洋らんクラブの会長も務めている。ランの栽培は温度調節など手間がかかるが「手入れた分、応えてくれる」と育てる楽しさを語る。仕事に趣味に、活気あふれる毎日を過ごしている。(津村 語)

▲ 4月2日 福島民友新聞掲載

大越さんはどのような仕事をしていますか。

大越さんは訪問先を後にするとき、なぜ「ありがとうございました」と言うのですか。

高齡化社会と「働く」ということについてどう考えるか、皆さんの考えをまとめてみましょう。